

平成 28 年 8 月 20 日

# 南の風リオ五輪号Ⅱ

南部ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

アメリカ戦は残念な結果でした。絶対王者に向かって行き、撃破された感じですが収穫もありました。オフェンスの戦術が王者にも通用したことです。特にスクリーンからの崩しとドライブインからの合わせは十分機能していました。予選リーグの戦い方も含めて書きます。

オフェンスからです。前号で触れたように、オンボールスクリーンからのスクリーナーとの合わせや、スクリーンの逆サイドのリフトへの合わせがしっかり機能していました。このリオオリンピックでは、日本のベンチはピック&ロールよりもピック&ダイブを多用していました。ピックの後のプレイが素早くできるからだと思います。(ミニバス、中学でも多用したいプレイです)

また、ユーザーがスクリーナーに単純に合わせるのではなく、ドライブから逆サイドのリフトするプレイヤーに合わせたり、ディフェンスのヘルプの状況から外のノーマークのプレイヤーにキックアウトしたりして、ミドルシュートや3Pを打たせるプレイも有効でした。相手ディフェンスに的を絞らせませんでした。しかし、合わせた後のミドルシュートの決定率が低かったことが返す返すも残念でした。アメリカ戦に限らず、オーストラリア戦、トルコ戦にも言えることでした。ペリメーターのミドルシュートは意外と難しいものです。3Pシュートは踏ん切りよく打てることが多いですが、中途半端な距離のシュートは、かえって打つ時に意識してしまいがちです。「外せない」という気持ちが強くなります。

「たら、れば」は禁句ですが、このミドルシュートの確率が上がっていれば、トルコ戦、オーストラリア戦は勝てたと思います。この2戦に勝っていれば、決勝リーグの初戦でアメリカに当たらなくてもよかったはずです。。。。。

もう一つオフェンスで気が付くことは、果敢なドライブインです。本川選手、吉田選手、高田選手の思い切りのいいドライブインは功を奏しました。そして圧巻は、渡嘉敷選手のストライドの広いドライブインでした。バスケットボールのオフェンスの常道、中を突くということはポストへのパスフィードだけではないことを、改めて示してくれました。もちろん、サイズのあるディフェンスがヘルプにすれば、外へのキックアウトからのシュートです。

こうした戦術が徹底されていたことが、予選リーグ突破に繋がりました。

次にディフェンスです。ディフェンスについては、かなり私見が強いことをお許しください。

まず、全員が必死に高さのある選手に食らいついて戦っていました。「簡単な得点を許さない」という姿勢が伝わってきました。また、ライントラップ(特にコフィンコーナーあたり)を仕掛け、ボールを奪ったり、パスカットを狙ったりする戦術がはまる場面がかなりありました。

ただ私が観て残念だったのは、トランジションの後のピックアップがルーズだったことです。ハリーバックして相手を掴まえるのが遅かった気がしました。サイズのある選手に対してポジションを取られてから(特にペイントエリア)マッチアップしてもボールは入ってしまいます。ハリーバックしながら「好きなエリアには行かさないぞ」という強い気持ちで守りたかったです。少しでも心理的にプレッシャーを与えたかったです。サイズが大きい選手は本当に厄介なものです。次号に続きます。